

SPELT

December 2015 Vol.4, No.1

実用英語教育学会

NEWSLETTER

目次

巻頭言

釣 晴彦 (実用英語教育学会会長)

第4回研究会について

特別講演・ワークショップ「英語を聞く・話すための手で作る発音—Elementary Session—」

古田 智隆 (カレンナチュールジャパン
ボイスワーク・トレーナー)

研究発表

研究発表1 「高校生の実用英語運用能力を向上させるためのルブリックの活用—実践報告」

宮越 哲史 (北海道札幌英藍高等学校 教諭)

研究発表2 「発音指導過程の可視化

—小学校で本格的な発音指導を始めるための段階的シラバスの提案」

久野 寛之 (札幌大谷大学 教授)

シリーズ

「小学校からはじまる実用英語教育」

「第8回 “Yes”は“Yes”, “No”は“No” — その1」

久野 寛之 (札幌大谷大学 教授)

お知らせ

巻頭言

実用英語教育学会 第4回研究会を終えて

実用英語教育学会会長 釣 晴彦
札幌学院大学人文学部 教授

実用英語教育学会も第4回研究会を終えました。ニュースレター発行に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

今回の最初の研究会報告は、宮越哲史先生が「高校生の実用英語運用能力を向上させるためのルーブリックの活用」として実践報告をしてくださいました。「英語会話」の授業を通じて生徒の実用英語運用能力を向上させることを目指し、評価をどのように活用して効果を高めたかについて報告してくださいました。

もう一つは、久野寛之先生による発音指導の研究発表です。発音指導過程の可視化—小学校で本格的な発音指導を始めるための段階的シラバスの提案—としての内容でした。久野先生は発音指導に関して多くの実践発表を行っています。アメリカでの先生の体験は、貴重であります。日本でどんな英語・発音を教えるのかと、とても示唆に富む発表でした。

特別ワークショップは、手で作る発音「英語を聞く・話すための手で作る発音—Elementary Session—」としてカレンナチュラルジャポン・ボイスワーク・トレーナーの古田智隆氏でした。古田氏は現在東京で活躍されています。北海道では初めての発音ワークショップでした。手を使うワークショップ。最初は半信半疑でありましたが受ける内にだんだんと引き込まれて行きました。如何に負荷をかけないで実践できるかをプロの歌手や様々な人のボイストレーニングを通して得た豊かな経験から生み出された手法には、驚かされました。とても医学的であり科学的な見地に立っており、この手法がもっと現場に広がっていけばと思えるワークショップでした。

私は、この発音のワークショップで中津燎子さんの執筆された「英語と運命」を連想しました。彼女は1974年に「なんで英語やるの？」で大宅賞を受賞して話題になった人です。発音訓練指導に関しては一番力をいれていた人です。

この一連の発音訓練手法を通して思えることは、久野先生の発音理論から古田氏の実践理論へと繋がり、実用英語教育学会の研究会は皆さんに自信を持って発信できるものになり大変意義のあったことと考えます。

私事ですが、この秋、島根県の松江市にある小泉八雲の資料館を訪れました。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン（1850～1904））は1890（明治23）年にアメリカのハーバー社の特派記者として来日し、それから日本に定住し14年間で日本文化に関する多くの独自の作品を著しました。彼は、日本で生活を始めた時は日本語の読み書きができなく、妻の節子と「ヘレン言葉」と呼ばれる独特な日本語で会話をし、再話文学の傑作「怪談」を生み出しました。妻の口伝えの原話から話しを創り直すという創作法は、異文化に対するの向き合いから共生という価値観を日本語の民話と音から引き出し、ある普遍性の領域に行き着いたのではないのでしょうか。これは正に多様性から価値を生み出したことになります。

今、実用英語教育学会は、小泉八雲の様に簡単には普遍的な価値観を生み出せませんが、英語教育関係者ばかりではなく活動を広く共有出来る方々に発信し、手法をシェアして共に学んで歩んで行きたいと考えております。

今後とも一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第4回研究会について

<特別講演・ワークショップ>

英語を聞く・話すための手で作る発音 —Elementary Session—

カレンナチュールジャポン ボイスワーク・トレーナー 古田 智隆 氏

発音をする際に、最も重要なのは舌の動きです。私は発音を体で覚えることを提案していて、実際にこの方法で小学生から86歳の方までに変化が見られ、しかもそれを持続させています。道具はいりません。必要なのは手だけです。手で音を作るのです。

発音できるようになれば、聞き取る事もできるようになります。基本の子音は5つ、「m、n、l、r、w」です。どの子音も長さを大切に発音してください。「今日はmの日!」といったように目標を決めて、その音に気をつけて発音してください。「きれいな英語を話したい」という気持ちがどれくらい強いかによりますが、1日2回でも毎日意識して発音すれば、1週間から3ヶ月くらいで習得できるでしょう。

まず、Mの発音から練習します。音と手を連動させましょう。左右の手をそれぞれ軽く握り、左手を上唇、右手を下唇と考えます。そして近づけて合わせます。この状態でmの音を作ってみましょう。手で作った唇が閉じているので、みなさんの口も閉じたままではありませんか? Imやme、my nameなどmの音を出す時に、mの長さも大切にしてください。

次にnです。nの音を出すときは、舌は上顎についていて、息は遮断されています。口は開いています。では、舌と指をリンクさせましょう。片方の手のひらを上に向けた状態から、指を曲げて鼻から息を出します。No!と返事をするときに、nの長さを大切にすると、英語のネイティブスピーカーは強い否定を感じるはずです。nの時間を十分に取って、曲げた指を広げながらNo!と言ってみてください。「n—no」という感じです。

Lは、舌先を口蓋につけて、舌の両脇から音を出します。ラリルレロの音を出すときより、舌先は前です。日本語にはこういう音はありません。

手のひらを上に向けて開いた状態から、指を曲げてながらlの音を出してください。やはりlの長さを長めにとってください。

Rは手のひらを上に向けた状態で、手首を上突き出すようにして発音してみましょう。手首が持ち上がると、みなさんの舌の後ろの方も上がっていませんか?このとき、舌先はちょっと丸まっていると思います。rの場合は、眉を上げるのもポイントです。これは舌先を口蓋につけないためです。しかめっ面では口を大きく開くことができません。眉を上げて顎関節を緩めることで舌のスペースを確保します。

日本人にとって苦手なlとrが含まれたplayとprayの練習をしてみましょう。lの音は十分に時間を取ってください。pの後に余計な母音を入れないように意識してください。playを発音しようとしてlの音のときに指を曲げた状態を保つと、何も考えなくてもplの後の音を発音せずにlの音を保ちます。これが、音と指の連動性なのです。prayでprで手首をあげた状態で止めると、同じようにrの音をキープできます。

最後にWです。語尾にwが来る場合は、通常口のカタチから唇を尖らせるまでの音です。腕を曲げた状態でこぶしを向かい合わせ、手を開きつつ腕を前に伸ばし、近づけてながらhowと言ってみてください。今、みなさんの唇は尖っているわけではありませんか。語頭にwがくる時には、伸ばした腕を勢いよく引きながらグーに戻します。ネイティブは、このとき唇からフィッと音が出ます。これでweやwhiteを発音してみてください。wの子音の時間も確保できていると思います。

ここからは、呼吸法や息の出し方について説明します。日本語を話しているときには、音はあまり鼻で響いていません。口が9割、鼻が1割くらいです。英語では鼻の割合がもっと高くなります。

コーラスで低い音も高い音も5対5くらいで歌えると、声が解け合ってきてきれいに聞こえます。ちょっと声を鼻にかけてみてください。その方法は、鼻を2回トントンと叩くだけです。まず、「あー」と声を出してください。その後で鼻をトントンと叩いて「あー」と言ってみましょう。声が太くなっていませんか。英語を話すときには、太い声が出せるようになります。

英語を話すときには、口ではなくて鼻から吸って発音してください。英語では低く太い音を響かせます。では、腕をぎゅっと閉じて体を固くした状態で、口から息を吐いてください。体は緩みましたか。では、同じように体を固くした状態で、今度は鼻から息を吐いてください。今度は体の力が抜けるのを感じませんか。緊張している人に深呼吸をさせると、体が固くなります。鼻から息を出すことで体が緩んでリラックスできます。こうすると低い音が響きます。

体を緩めると言ってもなかなかできません。息を吸う時のタイミングでのどが閉まったり、首に力が入ったりしてしまいます。手を閉じながら息を吸うと、頸椎と食道が近づいてのどが閉まります。今度はその逆で手を広げながら「あー」と音を出してください。声が太くなっているはずですが、

英語は語尾まではっきり発音する必要があるので、腹式呼吸が大切になってきます。背筋を伸ばして、お尻に力を入れては喉が開きません。文の最後まで音を響かせるために、骨盤と肋骨あたりを折り曲げてください。膝も緩めた状態で声を出してみましょう。お腹がへこんでいきませんか。胸が膨らまない、肩が上がらない、腰は膨らむことが腹式呼吸の条件です。

それでも腹式呼吸ができない人は、別の方法があります。英語を発音する時は、舌は口蓋のスポットと呼ばれる位置になければなりません。舌が下にある人は、次の方法で下げてください。指三本をうなじにあてて、鼻から息を吸って口から息を吐きながら自分が思う10倍くらいの力で下に引っ張ってください。これで舌は上にありませんか。この状態で、呼吸をすると胸はふくらみません。肩も上がりませんね。腹式呼吸の完成です。

一日に1回でも2回でも良いので、今日のことを意識して発音してみてください。これだけで、1週間か3ヶ月か個人差はありますが、変化が出るはずですが、頑張ってください。

(文責 三浦寛子)

研究発表1

高校生の実用英語運用能力を向上させるためのルーブリックの活用

—実践報告—

北海道札幌英藍高等学校 教諭
宮越 哲史 先生

「高校生の実用英語運用能力を向上させるためのルーブリックの活用—実践報告」というタイトルで、「英語会話」の授業を通じて、生徒の実用英語運用能力を向上させることを目指して、アウトプットを重視した3つのテスト、つまり、グループごとにオリジナルのダイアログを作成し、暗記して発表する「プレゼンテーション・テスト」、スピーチ原稿を作成して、暗記して発表する「ス

ピーチ・テスト」、そしてALTの英語の質問に答える「インタビュー・テスト」を実施しているが、その効果を高める試みとして「ルーブリック評価表」を活用していることに関して発表させていただきました。今回、私が強調したことは、プレゼンテーション・テストのルーブリックの評価項目に、「発音」とジェスチャー及び表情を評価する「表現力」を設定することを通じて、生徒たちが

豊かな想像力と表現力の持ち主であることが分かったことです。パワーポイントを利用して限られた発表時間内に端的に発表したつもりですが、出席者の皆様にご理解いただけたでしょうか。

また、出席者から2つの質問をしていただきました。

一つ目は、「なぜ15名、19名、33名という3つのクラス編成になったのか。なぜ3クラスとも20名以内に収めなかったのか。」という内容でした。その質問に対して私は、「故意に20名以下のクラスと30以上のクラスを設置したのではなくて、本当は全てのクラスを20名以下にする予定でしたが、生徒に配布したシラバスの注意事項に人数制限に関する記述を載せなかった。2、3年次混合クラスに関しては時間割作成上そのクラスを1クラスにまとめる必要があったので、33名クラスが1つできました。ただし、現在の1、2年生用のシラバスの注意事項には人数制限に関する記述を載せたので、次年度以降は全てのクラスが20名以下になります。」と答えました。

二つ目は、「授業見学をするために来校した大学教授や大学院生の視線を浴びてプレゼンテーション・テストを受けた生徒たちの様子はどうだったのか。」という内容でした。その質問に対して私は、「来校者の方々に加えて、その状況を写真撮影するために私の勤務校の教員も来ていました。生徒たちはビデオカメラとカメラのレンズが自分たちに向けられた状況で発表をしなければならなかった。そのため、普段とは違うぴんと張り詰めた緊張感が漂う雰囲気の中での発表だったので大変緊張してうまくできなかったという感想を残しました。」と答えました。

制限時間内にアウトプット活動を重視した3つのテストに対してルーブリックの活用がどのように影響したのかについて説明することができなかったのも、もし今回の私の発表に関心を持った方がいらっしゃいましたら、実用英語教育学会ホームページに今後掲載される予定の私の教育実践研究小論文をご覧いただければ幸いです。

研究発表2

発音指導過程の可視化

—小学校で本格的な発音指導を始めるための段階的シラバスの提案—

札幌大谷大学 教授
久野 寛之 先生

1. はじめに： 外国語学習における最も重要な学習項目の一つである発音や発音と文字の関係を初等教育段階において教えるのであれば、どこまで上手に発音できるように教え、努力させるべきかについて、学ぶ側の生徒と、教える教員側と、その2者を取り囲む日本という社会のニーズ（必要）に合致した明確な指導方針を立てる必要がある。

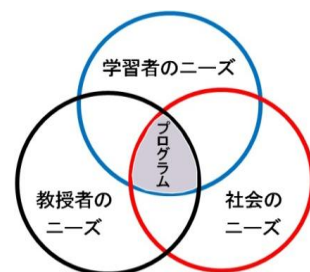
2. 学習者・社会のニーズと教員のニーズ

学習者である子どもたちは、映画や音楽ビデオで聞くネイティブのように英語を発音したいと思っている。親もそれを期待している。しかし、受験英語が大事だと思うのは親も子も同じだ。一方、

中・高の専科教員は、大学で英語音声学は学ぶものの、全員が教科書通りに発音できるわけではない。また、受験英語対策で、発音指導を後回しにしたり、そもそも教えてすらいないのが現状だ。小学校教員は、担任業務や他科目の教材研究が大変で、英語活動を運営するのが精一杯。発音指導をうまく指導に組み込む余裕はない。

4. 何のために英語・発音を指導するのか

そこで、小学校では、**教員が自信を持って教えら**



れる国語教育の一環として、また、その範囲内で、英語活動や英語教育を国語に関連付けていくと利点が多い。ただ、小学校教員が簡単に「できる」発音指導法を学び、生徒たちに発音はそれほど難しくないとすることを自ら示すことも重要だ。小学校では、日本語の音声とかな文字との関係を、ローマ字を通してしっかり理解し、そうして学んだローマ字から英語音声と文字との関係の理解へと進むことで、ローマ字学習と英語活動が同時に始まる小3で混乱を避けることができる。その際、音声(音韻/音素)とローマ字との間に原則として1対1対応の関係を保持するフォニックス指導が極めて重要になる。この原則を外すとフォニックス指導の効果が薄れる。

5. どんな英語・発音を教えるのか

目標となる英語モデルは、研究や分析が進み、教材資源も豊富な英米の英語とすべきである。「世界英語」や「日本人英語」は尊重すべきだが、目標にはなりえない。また、獲得目標は、Morley (1991)が提案するように、(1) 実際の会話の中で聞いて**わかりやすい英語** (intelligible)、(2) 自分の**言いたいことがうまく相手に伝わる英語**

(comprehensible)、(3) **自信をもって話せる英語**、(4) 指導者がいなくても、自分の発音の不十分点に気づき、自律的に改善できる聞き取り力と自己調整力。「ネイティブと同じ」英語を獲得する必要は全くない。

6. 日本人(⇒小学校教員)なら誰でも教えられる順番とは？

(1) 子どもたち(小3)が既に知り尽くしている日本語の文字と音韻知識を使って、音韻(音素)を学ばせる。そして、ミニマルペア(最小対語)を使って、音素を取り出す。「ん」にも最低3つの音が混在していることや、音使用の文字を除くと、1文字の中には2つの音があることを学ばせる。(2) 2つの音を分離するにはローマ字という方法があつて、それをこれから学ぶことを教える。

(3) 助詞「は」・「へ」・「を」や音便文字(促音「っ」・撥音「ん」・長音「う」・「お」/「い」・「え」/カナ長音記号「ー」)を使って、それらの音素と文字との対応は、人が勝手に決めたことだ(言語の恣意性)ということ教える。音声と文字との関係が人が都合で決めているので、時には1対1ではないこと、それは勝手にそうなったのではなく、人間が

決めたことだということに気付かせる。(4) 口の中を舌を動かしながら音を出すといろんな音が出て、口で作れる音には日本語の文字が充てられていない音もあるということに気付かせる。この時点で、英語の音素を口の形や下の位置をわかりやすく提示する。(5) 日本語で習ったローマ字を、(4)で習う、日本語とは異なる英語音素に当てる。つまり、恣意的プロセスを追体験させる。そして、これがフォニックス学習の基本作業になる(フォニックスは便宜上最も効果的な文字列に対応する音をはめ込んでいく作業です!人によって異なります)。この順番を経ることで、小3でのローマ字学習と英語音素と文字との非明示的接触(絵カードなどに何気なく英語で書いた綴り字を付記しておき、子供たちの目に触れさせること)が、子どもたちの混乱を最小限に抑えて、小5・小6での本格的なフォニックス学習へつながっていく。

7. 分業と分業の範囲、また、教員に求められる知識と技能

上記6.で述べた日本語に関する知識と技能は、国語を教える教員であれば全員身につけている、あるいは、身につけられるはずである。一方、英語については、(a) 個々の英語音素を声にして出すこと自体はそれほど困難ではない=誰でもできる。しかし、(b) それらの個々の音素を文として組み立ててうまく使っていくには、熟練(=英語力)が必要である。そこで、担任教員は(a)を中心に、ALTや専科教員は(b)を重点的に担当する。小学校では、日本語によるローマ字学習を通して、英語のフォニックス学習の前に必要となる phonemic awareness (音韻認識力・音韻に対する気づき)を身につけさせる。英語を通してやる方法も提案されているが、文字に接することなく完全に音だけで音韻認識力の訓練はしない方がよいとされているので、日本では日本語を使って担任教員がすべきだということになる。

8. 具体的な活動としては？

個々の英語音素の練習は boring(つまらない)し、うまくできない子には irritating(いらいらする)ものなので、すべてゲーム形式で楽しく進めていくのがよい。文科省も、また、支援するあらゆる機関も、そのための教材作成で小学校の先生方を支援すべきである。

久野寛之（札幌大谷大学 教授）

第8回 「“Yes” は “Yes”, “No” は “No”】— その1

“Yes” と “No” は簡単そうで難しく、どうでもよさそうで、全然どうでもよくない

今回の話題は、タイトルにあるように、“Yes”と“No”のお話ですが、「はい」と「いいえ」のような至って簡単な話題がどうして1回分の連載記事になるのかと、いぶかしく思っておられる向きもあるかと思いません。ところが、実際は、「はい」と「いいえ」はとても難しい問題なのです。前回の連載記事に、「**“uh-huh” や “uh-uh” を小学校から使わせる3つの理由**」として、こんなことを書いたのを思い出してください。前回の記事にはわかりにくい表現があったので、少し言い方を変えています。

まず第一には、“Hi!” や “Thank you.” といった表現と同じくらい頻繁に、しょっちゅう会話の中に出てくるからです。これは簡単ですね。

次に、第二の理由は、“uh-huh” や “uh-uh” が “Hello” や “Thank you.” 同様にとっても短く簡単な構造の語彙なので、英語の得意でない教員でも簡単に扱える上に、“Yes” と “No” とペアで常体・丁寧体の対立をなす待遇表現¹に相当するものだからです。待遇表現は日本語ネイティブとして習得すべき重要表現なので、“uh-huh” vs. “Yes”, “Uh-uh” vs. “No” といった対立を学ぶことは国語の理解を深めることにもつながるからです。

そして、いよいよ第三の理由ですが、これは、上の二つの理由よりも、もっと微妙で、しかも大事なことなので、次回「“Yes” と “No”」のお話をするときに、一緒にじっくりと説明したいと思います。ただ、じらすなよと言われそうなので、結論だけ言っておきます。

日本人は話し相手に、「聞いてますよ」という合図として「はい、はい」という相づちを打ちます

- 第1回： ○と×
- 第2回： 数と数字
- 第3回： アルファベット
- 第4回： “Nice to meet you.” と “Good to see you.”
- 第5回： “Excuse me.” と “I’m sorry.”
- 第6回： “Sir” と “Ma’am”
- 第7回： “Uh-huh” ・ “Uh-uh” ・ “Uh-oh”
- 第8回： “Yes” は “Yes”, “No” は “No” (1)
- 第9回： “Yes” は “Yes”, “No” は “No” (2)
- 第10回： ほめる・頼む・感謝する・同情する
- 第11回： 仕草と埋草
- 第12回： 《実用英語文法》? と…それよりもっと大事なこと

ね。そして、「はい」には “Yes” というまさにぴったりの直訳語があるので、英語を話すときも、相づちとして “Yes” を多発します。実は、これが「日本人はよく嘘をつく」という謂れのない批判の根拠となってしまいます。その意味で “Yes” はとても怖い表現です。ですから、その代わりに、“uh-huh” を使う癖を小さいころからつけておくと、変な誤解を受けるリスクを減らせていいですよ、というのが次回のお話になります。

さて、上で「変な誤解」と書いたのは、勿論、「日本人はよく嘘をつく」という誤解のことです。この誤解が、一民間人によるものならまだしも、一国の元首による誤解となれば大変なことです。勿論「そんな誤解など起こるはずがない」とお思いの読者もいらっしゃるでしょう。そこで、今回は、「いいえ、本当に、そんな大変なことが起こり得るんです!」と、声を大にして訴えたいと思います。そして、なぜ私たちが日本人が “Yes” と言うと、嘘をついたと誤解されてしまうのか、そんな誤解の原因となっている母語日本語の性質と、その母語の呪縛を振り切って、誤解の余地がない「はい」が英語で口をついて出てく

¹ コミュニケーションを円滑に進めるために、相手との上下関係や親疎の度合いを言語化したもの。丁寧語や敬語に加えて、軽蔑語なども含む。

るようにするために小学校からできる短期的作戦と長期的作戦について以下お話ししたいと思います。

国家的損失を生む…かも

日本の誇るノーベル文学賞受賞者大江健三郎は、1993年4月にカナダのバンクーバーで会談したエリツィン大統領とクリントン大統領のやりとりと言及して、「せんだってクリントン大統領が、エリツィン大統領に、——日本人はNOという意味でYESということがあるから、気をつけるように」と助言しました。あるいは、その逆だったでしょうか。それは新しいアメリカの大統領に好意と期待を寄せている日本人に対しても、その自尊心を傷つけたと思います。……日本人の約束には『あいまい』なことがあるから、気をつけるように!』と言っていたら「物議をかもしことはなかったのではないか?」²と書いています。日本人の「自尊心を傷つけた」というのは大変な表現です。学歴から言って、歴代大統領の中でも最も知的な大統領の一人であるクリントン大統領が、「あいまいな」表現を巧みに利用して、直截的ではなく間接的にNOを相手に伝えることができる日本語の美しさを理解していなかったことに、よほど大江氏は落胆したに違いありません。バンクーバーでの会談に同席したロシア人通訳がくしゃくしゃにして投げ捨てていたメモをカナダ人の記者が見つけて問題が発覚したようですが、そこには確かに“Sometime the Japanese say yes when they mean no.”と書かれていたらしいのです³。クリントン大統領は、本当に、大江氏のすすめに従って「日本人の約束には『あいまい』なことがある」という言い方をした方が良かったのでしょうか。

その判断は読者に委ねるにせよ、こんなこともあるのだということがおわかりいただけたでしょうか。これは、冷戦後のロシアが旧体制からの脱皮を果たすために自由主義諸国からの経済援助を



取りつけることができるかどうかが決定的に重要な問題となっていた中で起こった現実の出来事です。各国から経済援助を獲得するためには何が必要か、エリツィン大統領がそのための助言をクリントン大統領に求めるという生々しい世界政治の文脈の中でこの発言がなされたのです。アメリカだけでも25億ドル規模の包括的援助計画が話題になっていました。そのような次元では、YESかNOかの違いはとてつもなく大きな意味を持ちます。「コーヒー、もう一杯いかがですか」に対する返答が問題になっているのではありません。日本円にして何千億という巨額の援助資金をめぐる交渉の場で交わされるやりとりの話をしている時に、「日本人の約束には『あいまい』なことがある」と言うのと、「日本人はNOという意味でYESということがある」と言うのとでは、天と地の開きがあるでしょう。もし、読者諸氏がクリントン大統領で、本当に「日本人はNOという意味でYESということがある」と思っていたなら、エリツィン大統領に「助言」を求められて、はてさて、どちらの表現を選ぶでしょうか。

いずれにしても、冷戦時代の世界の二強の元首が「日本人はNOという意味でYESということがあるから、気をつけるように」しようと話し合ったのです。この事実を私たちは重く受け止める必要がないでしょうか。

“Yes”/“No” 問題の核心

文学者の大江氏は、この問題は、クリントン大統領の代表するアメリカの言語文化が《曖昧さ》を美德とする日本の言語文化を受け入れることで解決できると考えました。一方、クリントン大統領は、真実に対して忠実を貫く《誠実さ》を美德とするアメリカの言語文化は世界中で尊重されて然るべきだと考えている。そんな両者の妥協は容易ではないように思えます。しかし、そのこと以上に問題なのは、この二人の対立する要求が、日本人の“Yes”/“No”問題の持つ二つの側面についての単純な不理解に起因しているということです。この不理解さえ取り除けば、対立は自動的に取り除かれるということです。

では、日本人の“Yes”/“No”問題の持つ二つの側面とは何か。それは、(1) 純粹に言語学的な問

² 大江健三郎 (1995) 『あいまいな日本の私』岩波書店, p.188

³ Taylor Branch (2009). *The Clinton Tapes: Wrestling History with the President*. NY: Simon & Schuster, p.56. 第4章の“Culture Clashes: From Bosnia to a Haircut” (「文化衝突: ポズニアから散髪まで」) にこのエピソードが記されています。

題としての側面と、(2) 日本人のコミュニケーション・スタイルに関わる根の深い文化的な問題としての側面です。外国人のクリントン大統領の側に日本人や日本語にかかわる誤解があっても当然ですが、日本を代表するノーベル賞作家の大江氏の側に外国語としての日本語の問題点についての認識が欠けていたことは深刻です。そのために、一国の大統領を、「日本人の自尊心を傷つけた」などと結論づけてしまったのですから、実に悲しむべきことです。このような問題を二度と生み出さないよう、まずその問題を生み出す背景についてよく理解することが大切です。そして、その理解の上に立って、“Yes”/“No” なんか何の問題もないという誤解を捨て、子どもたちが小学校から少しずつ “Yes” や “No” を注意して使っていくよう助けてあげることが肝心です。

YES/NO の言語学的問題(1)—何に対してYESなのか

それでは、まず、“Yes” と “No” の言語学的な問題から見てみましょう。ここには二つの純粋に言語学的な問題が含まれています。

70年代に日本にやってきたドン・マローニというアメリカ人ビジネスマンがいろいろと面白いことを書いています。マローニの著書の中には、クリントン大統領がエリツィン大統領との “small talk” (雑談) のネタにした問題の教科書的な事例が示されているので、見てみましょう。

日本人は、「ノー」なんてつれないことはほとんどおっしゃらない民族だが、万一それを口にしたとしても、どうやら「イエス」の意味に近いらしいのだ。

たとえば、“Aren’t you going?” (行きませんか?) と聞かれた時、ほんとは行きたければ、我々外人なら至極明快、“Yes, I’m going.” と返事する。反対に、行きたくなければ、これまた明快に “No, I’m not going.” だ。つまり、質問の形がどうであれ、行きたければ答えはいつも「イエス」だし、行きなくなれば「ノー」と決まっている。

ところが日本人は逆だ。行きたくない人が「はい、行きません」と答え、行きたい人が「いいえ、行きます」と言うのである。しかもたいていの日本人は、英語で話す時も、つい

この癖が出るらしく、“No, I’m going.” でもってイエスの意思をあらわすんだから、ややこしいことこのうえない。⁴

この問題は、日本語ネイティブと英語ネイティブとが何に対して “Yes” あるいは “No” と答えているのかに対する違いから生じています。

日本語ネイティブの聞き手は、「行く」のか「行かない」のかを答える際、慣習として、「あなたが口で直接言っていないこと、つまり、あなたの気持ち(判断や期待)もちゃんとわかっていますよ」という合図を送ることを期待されます。そして、その合図を、はじめの「はい」又は「いいえ」という部分で示すのです。その結果、「行きませんか?」という質問に対しては、次の4つの場合がありうることとなり、非日本語ネイティブにとっては恐ろしく面倒なことになるのです。

- (1) 「はい、行きます。」:「あなたは【私は行く】と思っていますね。あなたの判断は正しいです。私は行きますよ。」
- (2) 「はい、行きません。」:「あなたは【私は行かない】と思っていますね。あなたの判断は正しいです。私は行きませんよ。」
- (3) 「いいえ、行きます。」:「あなたは【私は行かない】と思っていますね。あなたの判断は間違いです。私は行きますよ。」
- (4) 「いいえ、行きません。」:「あなたは【私は行く】と思っていますね。あなたの判断は間違いです。私は行きませんよ。」

もしこれがお芝居のセリフで、“Aren’t you going?” という英語ではなく、「行きませんか」という日本語が書かれていたとしましょう。あなたが日本人ネイティブなら、そのセリフの返答として上の4つのどれが書かれていたとしても、「行きませんか」の言い方—声の調子や抑揚—を変えて、何の問題もなく、この4通りのやりとりを自然なやりとりとして再現することができるでしょう。でも、それが外国人には至難の業なのです。

“Yes” か “No” で答える質問に対して、日本語のように、相手の頭中の判断や期待が正しいかど

⁴ ドン・マローニ(1984)『続 外人はつらいよ』角川文庫, p.29.

うかを確認する答えとして“**Yes**”/“**No**”を文頭に添えるという習慣は英語には存在しません。だから、英語には、常に、2通りの答えしかありません。マローニの言う通り、「至極明快」なのです！

Yes, I'm going.

No, I'm not going.

“**Yes**”は単に肯定の合図、肯定が続くことを示す道標です。それに対して、“**No**”は否定の合図。否定が続くことを示す道標です。肯定とは、単純に“**not**”の入っていない命題であり、文です。逆に、否定とは、単純に“**not**”の入っている文である。“**Yes**”と言え、それは、「後に“**not**”の入っていない文が続くよ！」という合図であり、“**No**”が来れば、それは、「後に“**not**”の入っている文が続くよ！」ということを先行する合図で示しているのです。そして、後に続くものは、どちらか一つであることが言語として絶対的に保証されているので、“**Yes**”と“**No**”と答えて、あとの文は省略しても、十分事足りるのです。

ところが日本語ではそうはいきません。英語には存在する、その絶対的な保証、担保がないのです。私たちの日常生活でも、母親が「行かないの？」と聞いて、子どもが「うん」だけだとすると、「うん、何？行くの、行かないの？」と突っ込まなくてはならないということがありますね。これは、日本語ネイティブでさえ、この日本語の「はい」と「いいえ」の無担保性に困らされることがあるという一例です。まして英語ネイティブにとっては、“**Yes**”が“**Yes**”、“**No**”が“**No**”じゃないなどというのは、とんでもない事態です。日本に住んで、日本人との付き合いが長い英語ネイティブなら、「複雑怪奇な言語慣習」として受け入れてもくれるでしょう。しかし、日本語の言語慣習に知識も慣れも全くない人間ばかりの英語圏で日本人がこれをやってしまうと、“**Yes**”と言いながら、実は“**No**”だなんて、よくも真顔でそんな嘘がつけるもんだ！」と思われてもしかたありませんね。

ただ、日本語ネイティブは、いつも英語で“**Yes**”と言うべき時に“**No**”と言い、英語で“**No**”と言うべき時に“**Yes**”と言ってしまうのかというと、決してそうではありません。これは、否定疑問文というシステムが引き起こす

特殊な現象です。もし疑問文が肯定疑問文なら、日本語ネイティブも英語ネイティブも、言語行動は全く変わりません。つまり、もし世界の言語に肯定疑問文しか存在しなかったら、マローニの指摘したような問題もまた存在しなかったのです。マローニは、日本語ネイティブが英語ネイティブと著しく異なる奇妙で困った言語行動をとる否定疑問文を槍玉にあげて、「日本人は…行きたくない人が『はい、行きません』と答え、行きたい人が『いいえ、行きます』と言う」と、センセーショナルな言い方をした。それだけ聞かされれば、「ええ?!頭のいい日本人が本当にそんな支離滅裂なことを言うのか?」と、誰もが思うでしょう。でも、たとえ日本語ネイティブであっても、ただ「行きますか?」と聞かれたら、行きたくないときには「いいえ、行きません」と答え、行きたいときには「はい、行きます」と答えるのです！単純明快、この2通りの答えしかありません。

YES/NO の言語学的問題(2)—YESって何?

再びマローニに問題を提供してもらいましょう。

…私の友人に、日本人が「はい」と言った時は「イエス」の意味なんだ、と思い込んでいる人がいる。私は彼に何度も説明した。日本人が「はい」と言ったとしても、必ずしも、こちらの言わんとすることの意味を理解したというわけではなく、ああ、何かおっしゃってますね、その音声がかえりました、という意味にしか過ぎないこと。「はい」と言ったって、必ずしも、「はい、わかりました」とか、「はい私も同意見です」とか、「はい、あなたのおっしゃるとおりにいたします」とかいったような、肯定の意味ではないこと。こちらの話している声というか、その音が聞こえました、という意味でしかないことなどを再三再四、説いたのである。

しかし、この男、これに耳を貸さないばかりか、「ああ、そうですか」についても…「ああ、そうですか」は、私の言うところの「はい」と同じ意味であって、「ああ、そうですか」と言いながら、相手はしきりにうなずきはするけれど、



「イエス」という肯定の意味じゃないんだよ、と私がいくら説明しても、なおも耳を貸さないのである。⁵

実に面白い話です。つまり、英語の“Yes”や“uh-huh”や“yeah”は日本語の「はい」と同じものではないということです。「日本人が『はい』と言った時は『イエス』の意味なんだ、と思い込んでいる人がいる[が、そうではない]。……『はい』と言ったって、必ずしも、『はい、わかりました』とか、『はい私も同意見です』…とかいったような、肯定の意味ではない。……相手はしきりにうなずきはするけれど、『イエス』という肯定の意味じゃないんだよ。」とマローニが言っています。この発言から言えることは、英語ネイティブの世界では、“Yes”＝うなずき (nodding)

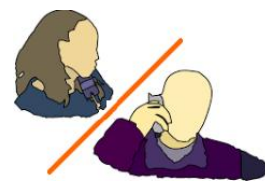
“Yes”=“I understand.” or “I agree.”

ということです。つまり、欧米では、これが原則です。ところが、日本人はただ単に「聞いていますよ」のつもりで“Yes”と言います。中国人は、わからなくても、「わからない」というと面子にかかわるので、わかってなくても“Yes”を言うらしい⁶ですが、そんな言語慣習は、英語ネイティブにとってはたまったものではありません。

ある英語ネイティブによると⁷、電話で誰かが“Yes”と言えば、それは幾通りにも解釈できて、“Okay.” (うん、そこまではわかった。それで?) “I see.” (なるほど) “That makes sense.” (それは筋の通った話だと思うよ。) “I hear you.” (わかる(共感)。/わかってるよ。/聞いているけど。) “I understand.” (わかる。) “Of course.” (そりゃそうだとも。) “I agree.” (同感。) “I’m with you.” (同感だ。同意見だ。賛成だ。/同じ意見の者としてきみをサポートするよ。) “I concur.” (同じ意見だ) “Yeah.” (そう) “You are right.” (きみ

の言う通りだよ) “Right on!” (全くもってその通り!) のいずれかにも当てはまる可能性があるといえます。紙面の関係で詳しくは説明できませんが、専門の研究でも、“Yes”などの相づちにこのように多くの機能があることが指摘されています。これを聞くと、読者の皆さんは、英語の“Yes”も日本語の「はい」と似たところがあるではないかと思われるかもしれません。でも、大事なのではなく、我々が「はい」の直訳で使っている英語の“Yes”は“I’m listening.” (「聞いています」) という意味だけではなく、明確な同意を表すためにも使われるということなのです。

また、このネイティブが“Yes”に12もの表現で言い換えることのできる、それぞれに少しずつニュアンスの異なる意味



を付与できたのは、おそらく、彼(又は彼女)が電話で耳にする“Yes”の意味を論じているからでしょう。面と向かっての会話であれば、顔やしぐさなどの視覚情報によって“Yes”の解釈はもっと限定されます。欧米人の「聞いています」は、ことばにするなら“Keep going. I’m listening.”/“Go on. I’m listening.” (話し続けて。聞いていますから。/続けて。聞いているから。)のような表現になりますが、そんな長ったらしい英語をいちいち口にするのは大変効率が悪い。そこで、彼らは、最も安上がりの効率的な方法を使う。それが、good eye contactを保つということです。彼らはただ相手の目を見つめることで、「聞いていますよ」というメッセージを送るのです。このように、英語ネイティブが対面の会話で“Yes”という言葉が発するときの意味は、日本人が「聞いてますよ」という意味の「はい」と同じ意味で“Yes”と言うのとはますます異なっていることがおわかりいただけると思います。

ここまでのお話で、日本人の“Yes”/“No”問題の持つ二つの側面のうち、言語学的な問題としての側面については凡そ理解していただけたと思います。もう一つの問題である「日本人のコミュニケーション・スタイルに関わる根の深い文化的な問題」と、「わかったけど、それじゃあ、どうしたらいいの?」という問題については、次回にまとめてお話ししたいと思います。今回は、紙面が尽きてしまいました。それでは次号の連載で!

⁵ ドン・マローニ 前掲書, pp.28-29.

⁶ Mia Doucet, “What Part of Yes Don’t You Understand?” 2011年4月23日閲覧 http://memagazine.asme.org/articles/2008/november/Part_Yes_Dont_Understand.cfm (MEMはアメリカ機械工学会の学会誌。上記の記事は同誌の2008年11月号の特集記事の一つ。)「わからない」時に「わからない」と言えないのは日本人も同じようです。筆者の知人のアメリカ人ビジネスマンが、「日本のビジネスマンは同意していないのに同意しているかのように頷くことがある。日本人そうするのは、実は話の内容が分かっていなかったり、同意しているのではなく、話の内容について斟酌しているときだった」と言うのを聞いたことがあります。

⁷ “Saying ‘Yes’ or ‘Uh-huh’ during a phone call...?” Yahoo! Answers. 2011年4月25日現在 <http://answers.yahoo.com/question/index?qid=201110424224527AAjUTnA>

お知らせ

◆研究紀要の発行について

実用英語教育学会では研究紀要（年1回発行、査読付き、ISSN取得）を発行しております。内容については、学術的な実験・調査および理論的考察等をまとめた「研究論文」と、教育実践にもとづく知見を報告する「実践研究」の2部構成となっております。

第4号まで発行されておりますので、詳しくは実用英語教育学会ホームページ(<http://spelt.main.jp/>)の右側の研究紀要の各号をクリックしてご覧ください。

紀要原稿の締切は9月末日（予定）ですので、皆様の投稿をお待ちしております。

なお、投稿者資格として本学会の会員であることが規定されておりますので、まだ会員になられていない方は事前に入会手続きをお済ませくださいますようお願いいたします。

そのほかの詳しい投稿規定については、事務局までお問い合わせください。

◆2016年度研究大会について

2016年2月20日には研究大会を開催する予定です。研究や実践について発表する場でもありますが、学校種を問わず英語教育に日頃携わる方々と率直な意見交換のできる場をつくりたいと考えております。今年度は基調講演者に旭川北高等学校の松井徹朗先生をお招きし、「ビジョン5-16：小中高大連携のこれまでとこれから——旭川の試み」をテーマに掲げて開催いたします。非会員でも参加できますので、ご興味をお持ちの方は是非この折にSPELT気軽に参加してみてください。

◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しております。年会費は4,000円です。会員の皆様は、研究会や研究大会の参加費が無料になるほか、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。



編集後記

今年度は研究会が10月末の開催となったこともあり発行が遅れておりましたこの*Newsletter*も、通算で8号目となります。研究紀要も間もなく第5号が発刊の予定です。皆様のご支援とご協力を得ながら、ゆっくりながらも何とか歩みを進めて、校種を超えた研究会に育ってきています。今回の研究会では、ボイスワーク・トレーナーの古田智隆氏をお招きして、英語の発音指導方法についてのワークショップを開きました。全員が楽しく参加しながら新しい指導方法の一端に触れることができ、研究会後のアンケートでも「続編」を期待する声が多く聞かれました。これからも、研究会・研究大会では、研究発表のみならず、このようなワークショップや、自由な意見交換ができるフォーラムの開催を継続していきたいと考えております。なるべく早い時期に、プログラムの全容をお知らせするように努めますので、皆様のご参加を心からお待ちしています。

実用英語教育学会

編集：SPELT Newsletter 編集委員

発行：2016年12月31日

事務局：〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1969 (直) Fax: 011-742-1654 (代)

Email: info@spelt.main.jp ※◎を@に変更してください。